

周縁から権力構造をとらえ返す

——MICCS『インターセクション』第2号の目指すところ——

森 千香子
鈴木 越生

MICCS（同志社大学都市共生研究センター）の紀要である本誌は前年度に創刊し、無事に2号目を迎えることになった。MICCSの現在の活動は、本センターが拠点の1つとなっている人間文化研究機構「グローバル地中海地域研究」のプロジェクト（2022 - 27年度）を中心におこなわれており、本号収録の諸論考の多くもその活動に紐づいている。創刊号で述べた通り、このプロジェクトのなかで本拠点は、境界を超える人々を管理し利用しようとする統治のイデオロギー（レイシズム、植民地主義）や政策と、それに抗する越境者たちの思想や運動を掘り起こしていくことを主題とする。以下、今号掲載の諸論考がこの全体の主題とどのように関連しているか概括し、今号の導入とする。

前号では講演録、インタビュー、エッセイ、書評という4種の前稿が集まった。今号ではインタビューと書評を欠く代わりに、新たに翻訳と映画評を収録した。前号とはまた違った活動内容にもとづく前稿が集まったことで、MICCSの異種混交な多彩さをさらに示す内容になっている。

講演録は、2023年5月の公開研究会での講演にもとづく論考「ムーリッドを中心とする在日セネガル人の民族誌的研究序説」（清水）である。ここでは人類学者の和崎春日を中心とする在日アフリカ人研究に関わってきた著者が、その後の研究史を端的にまとめつつ、自身の在日セネガル人調査の現時点での成果を報告する。とりわけ、現地調査で発見した移民の世代論というアイデアを検討する筆致からは、自分のみてきたフィールドから現実描写と学術的議論を立ちあげていこうとする著者の信念が伝わってくる。在日外国人のなかでは比較的知られていない在日アフリカ人の生活についても、堅実な民族誌的研究が積み重ねられていることがわかる貴重な一本である。

エッセイ「制度の外から中へ」（崔・三宅）は、異なる文脈で制度からの排除／制度への包摂を経験してきた著者同士が、互いの経験を共振させていく刺激的な協働の成果である。著者たちが経てきた公的な制度「外」の経験自体は、学校教育からの離脱（高校中退）／国民国家からの排除（無国籍）と互いに異なるが、ともに制度の外から中へ入ってきた（大学入学／国籍取得）点に共通性が見出される。このような排除／包摂の経験をした者の目に映る世界を表現するこのエッセイは、自らを排除してきた、そしていまも誰かを排除している

制度の一員として組みこまれることへの葛藤を抱きつつ、それでも「互いにエンパシーを持つ方法」を探るために自身の経験を開示し読者に手を差しのべている。

つづく2本の翻訳は、いずれもフェミニズム／クィアの主題を扱っている。フェミニズムやセクシュアリティの問いは、MICCSの活動にとっても『インターセクション』というタイトルを掲げる本誌にとっても、極めて重要と言える。だが、時間の制約に阻まれ、本誌創刊号では取りあげることができず、課題となっていた部分である。

まず、韓国の若手研究者カン・オルムによる2015年の論文（森田訳）では、ソウルの麻浦区がいかにしてレズビアンが集住するクィア都市となったかが、当事者や運動体に寄りそった調査から明らかにされる。2022年のハロウィンに大規模な事故が起きた梨泰院など、男性ゲイ・エリアとして知られる場に比べ、麻浦における女性レズビアンの存在はそれほど可視化されていないという。カンがセクシュアル・マイノリティという括りのみではみえないゲイ／レズビアンのジェンダーの差異に注意を向け、レズビアン特有の経験を現代ソウルの都市状況と重ねあわせて丁寧に辿っていく。麻浦のレズビアン集住性に驚き、その背景を知ろうとして本論文に辿りついたという訳者の解題は、その後の麻浦の近況も補足するアクチュアルな現地報告ともなっている。

次に、合州国の詩人・思想家オードリー・ロードによる1982年の「怒りの活用」（鈴木訳）は、反レイシズムやフェミニズムの運動・思想界でよく知られた古典である。黒人で、レズビアンながら子をもったロードは、その重層的な立ち位置から独自の差異の思想を練りあげた。今回訳出された論考は、消極的に評価されがちな怒りという感情を、他者を知る手がかりとなり社会変革の力へつながる創造的なものと位置づける。感情や感覚を糸口として差異を理解し創造的に用いるという、ロードの思想をよく表す一本である。北米先住民の批判的政治思想を研究するなかでロードの思想と出会った訳者の解題は、怒りの活用を打ちだす本論がいまどのように継承・展開されているのか、そこに見出せるロードの差異の思想とはどのようなものなのかを論じる。

最後の映画評（森）の対象は、自身も郊外出身の監督による、フランス郊外住民を描いた映画である。フランス語で郊外を意味する「バンリュー（banlieue）」には、「排除された者たちの地帯」との語源があるという。その名の通り移民貧困層を含め都市から排除された人々が生きるバンリューには、しかし、定型化されたイメージとは異なる生活者の姿がある。評者は、このような視点からバンリューを捉えた「郊外映画」の系譜に、マリ出身でパリ郊外育ちのラジ・リ監督の新作を位置づけつつ、同作品が、郊外の「移民」を都市の「フランス人」と分ける思考の型を切りくずし、同時代に生きる移民のリアルを伝えようとしている。

本号に収められた論考は、主題も方法もジャンルも多彩で、まさに異種混淆そのものである。だが、すべてをつなぐ共通点もある。それは、周縁から権力構造をとらえ返す、という姿勢である。そのような姿勢は、国家権力と資本主義による種々の「統制」が諸領域で強ま

り、閉塞感を増すばかりの大学において、新たに空隙を生み出す試みにつながる。このような試みを自由におこなえる媒体となることが、本誌の願いである。